

キャンパス・コラム

本学が21世紀においても一級の高等研究教育機関としての役割を担うためには、大学院大学へと大きく飛躍する必要があります。日本貿易振興会「アジア経済研究所」跡地の都心キャンパスを活用して、本学の研究教育水準を国際競争に耐えうる水準に高めるように努力することが求められます。

そうした努力の一つとして、21世紀には本学教員の採用要件を博士学位取得者として未取得者には採用後一定期間の学位取得義務付き任期制とすることだけではなく、研究と教育に関する自己点検と外部審査を行い教員組織や研究教育体制を定期的に洗い直す制度を構築することも求められます。

本学は、建学の精神「実地応用の素を養う」（『英吉利法律学校設置広告』郵便報知新聞付録第3731号、明治18年7月30日）を基礎に「質実剛健」のスローガンを掲げ研究教育を行って

きています。21世紀の時代、いかなる目的のために「実地応用の素を」のかが問題です。

日本社会はいま、グローバル化・高度情報化・グリーン(環境重視)化・少子高齢化といった潮流の中で、国だけではなく地方公共団体・民間非営利団体・企業などあらゆる社会レベルで、社会の変革が求められています。こうした歴史的な動向を洞察して、新たな社会理念と新たな社会秩序を開拓するための「実地応用の素を養う」研究教育を実践することこそ、21世紀における本学の社会的貢献となると考えます。

つまり、21世紀の本学の目指す教育は、「新たな社会理念と新たな社会秩序の開拓」を実践できる人材の養成にあるといえましょう。

そのためには、国内外の大学や研究所と連携をとりながら、(1)グローバル時代に即した研究教育、(2)社会人にオープンな研究教育、(3)新たなアカデミズム構築を目指す研究教育、を地道に実践していくことが不可欠です。

広報委員 横山 彰(総合政策学部教授)

編集後記

硬式野球部が10年ぶりに1部復帰を果たした試合を神宮球場で観戦した。取材のはずだったのに、いつの間にか、私は個々のプレーに拍手をしたり、声を上げたりしていた。スタンドの熱気につられて声援を送っているうちに、愛校心が沸き上がってきた▼先日のウォーキングラリーに参加したときもそうだった。普段多摩動から中大までの坂道を登り下りする以外は、ほとんど運動らしい運動もしていないし、32^キという距離の実感もないまま、軽い気持ちで参加した▼案の定、前半の山越えで疲れてしまい、最後は黙々と足を運ぶのみ。それだけにゴール後は、満足感というか、達成感というか、とにかく一緒に歩いた中大生に連帯感を持った▼自分がなぜ、中大に入ったかということも考えたこともないし、大学生である自分を意識はしても、中大生であることを感じたこともない。しかし、イベントへの参加で改めて中大が好きになった。中大生である自分も誇りに思えた、そんな貴重な体験だった。

(杉村 麻衣子)

Hakomon
ちゅうおう

'99・7月号(第150号)

1999年(平成11年)7月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12

電話 03-3631-8141